



特別賞 三省堂書店賞

書評 石川拓治著 『奇跡のリンゴ』 (幻冬舎, 2008) (625. 2/53//S)

情報コミュニケーション学部4年 天貝祐樹

これは現実の物語である。

青森県のリンゴ農家の木村さんは、奥さんが農薬に過敏な体質だったこともあり、リンゴの無農薬栽培を始める。この無農薬栽培への挑戦が、木村さんを死へ追い込んでいくような過酷な道のりの端緒を開くことになる。

1970年代時に、無農薬でリンゴを育てようとする農家など、木村さんを除いて誰一人いない。なぜなら、リンゴという農産物を育てるには、農薬が必要不可欠であったからだ。そもそも農薬がなければ現在我々が食べている甘いリンゴはつくり出すことができない。それは、誰もが信じて疑わない常識であった。

しかし、木村さんはその常識を捨て、農薬に変わる新しい害虫よけになる食品をさがす。木村さんは数年の間に、いろいろな食品を試した。しかし、いくつもの食品を試したが、木村さんのリンゴの木から害虫は消えない。次第に生活は困窮する。木村さんには家族がいる。まともな子供たちにもものを買ってあげることができない。自分の挑戦によって、苦しんでいる人が目の前にいる。家族のことが木村さんに罪悪感という重荷を課した。

そんな中、ある夜、木村さんは強い決意を持って、裏山にあがる。ロープを持って山を登っていく。自殺を決意していたのだ。自分の挑戦によって、いろんな人々を苦しめている。自分さえいなくなれば、周りのみんなは救われる。木村さんの死への決意がロープを木に投げさせる。

そこで、起きたことは紛れも無く奇跡だった。ロープがうまく木に掛からず、落ちてしまい、それを拾いに降りたところに、リンゴの木が生えていた。害虫に弱いリンゴの木が、このような自然の森の中にあるはずがない。よくその木をみると、それはドングリの木であった。しかし、木は木である。なぜ、このような立派な木が、農薬もない大自然の中で育っているのだろうか。木村さんは、この一本の木との出会いから、大自然のメカニズムを知る。それは「孤立して生きている命などない」という決定的な大自然の中の真理である。土を調べる、虫を調べる。そこには自然が生み出した、絶妙な食物連鎖のバランスがあり、その中で命が育まれている。甘いリンゴをたくさん育てるために、様々な命を殺してきた農薬では絶対にできない、自然のサイクルの中でリンゴという生き物を育てること。命と命が噛み合わさり、だからこそ本当に美味しいリンゴができる、その真実。

それから数年後、さらに試行錯誤を加えながら、木村さんはとてつもなく美味しいリンゴをつくりあげていく。それは命の味であるという。常識を捨てた男は、最終的には命というものをみつめて、大きな大きな答えをだした。このリンゴの物語は、木村さんとリンゴの命の物語である。